

6. 全体討論



金井 最後のプログラムになりますが、全体討論として、今回この会に参加して頂いた先生方からお話を伺わせて頂きたいと思います。まずは、

昨年冬の釜石市、今年夏の田辺市、そして今回の黒潮町とこれまで三回開催させて頂きました。最初の釜石市では、顔合わせの会として、集まって頂いたみなさんがそれぞれでこんなことやっているのかをについて情報交換をさせて頂きました。そして、今年夏の田辺市では、多くの現場の先生方が抱えておられるであろう課題として、「防災教育をどのように進めていくのか」、「効果的な防災教育のために、子どもたちとどのようなコミュニケーションをとればよいのか」という点と、「家庭・地域を連携した防災教育をどのようにすすめていけばよいのか」という点について、二つのパネルディスカッションとグループディスカッションを通じて具体的に議論させて頂きました。そして、それを踏まえて、今回はさらに具体的に「地域、子どもを育む環境をどう作っていくか」という観点で、昨日、座談会とグループディスカッションを通じて、議論させて頂きました。

最後に、今回参加して頂いて、思ったことや、「こんなところがためになった」といった感想等をご発言して頂いて、情報交換したいと思います。

嶺口 田辺市教育委員会の嶺口です。率直な感想です。「学校と行政とが一体となって取り組んでいる」、「町をあげて一本化している」というのを見て、本当にこの町は素晴らしいなと思いました。昨日の町長さんの「子どもが地域を守る」という言葉にそれは象徴されているかと思います。そして、昨日はあれだけの方々が集まってきて、本気の意見をだされていました。やっぱり防災教育は、如何に本気なのか。やっぱり教師が本気になれば子どもは変わらない。それが根本的なところだと思います。そういった面で、田辺市から一緒にこの会に参加してきている先生方と、昨日も一昨日も2時過ぎまで集まっていろいろと話をしたんですけども、毎回この会に参加させてもらって、「すごく力をもらおう」、「元気をもらおう」、「やる気をもらおう」といった感じだな、と思います。

五十嵐 三条市立第一中学校の五十嵐です。2回目の田辺市に行かせて頂いたときは、新庄中学校の実践を見させてもらってすごく刺激を受けました。「こういう実践ができるんだな」、「こういうプログラムで学校運営ができるんだな」ということを改めて目の当たりに見させて頂いて、勉強になりました。今回の黒潮の場合は、今お話にあったように、町長さんをはじめ、行政と学校とが一体化して防災教育を進められているという点でまた勉強になりました。

昨日、能登の中学校で「防災教育と学力とが相関関係にあるのではないか」という話がありました。うちの学校も3年前から防災教育に取り組んでいるんですけど、それまで学力がなかなか上がらずに困っていたところ、ちょうど3年前から徐々に学力が上がりはじめました。学力テストの結果を見ると、1年でだいたい1.5ポイントずつ上がっているんですね。3年前は学力偏差値が48くらいだったんですけど、今は53くらいに上がってきています。それと、私は社会科を担当しているので、子どもたちが夏休みの課題で、人権作文や税の作文を書いたものを一通り目を通すのですが、なんか最近ちょっと視点が違うなあと感じています。それまでは自分のこと、自分の視点で見ていたものが、この防災を始めるようになって、子どもたちがいろんな視点で物事を見るようになったと思っています。それが原因なのか、新潟県内のトップレベルの賞を続々と受賞するようになりました。小木中学校の話聞いて、ちょっと検証してみる価値があるかなと、どういう関係があるのかを調べてみたいなと思いました。そういった意味で防災教育の拡張性というか、今後の取り組みをやるうえでは、少し振り返ってみる必要があるような気がしました。

松本 新宮市立緑丘中学校の松本です。五十嵐先生と同じように、私のところも学力がアップしていればいいんですけど、防災教育をはじめてまだ2年くらいなので、まだこれからといった状態です。しかし、「主体的に学ぶ」というところでは明らかに変わってきているなと感じることもあります。「子どもたちが自ら学ぶ」ということは、防災教育に取り組む中で、可能なものやっつけていこうという教育意識などを含めて、絡めることができるかなと思います。

話を戻してしましますが、黒潮町に来させて頂きまして、行政との一体化ということが非常に興味深かったです。また、参加されている先生方の意識の高さを感じました。これまでは「どうやって継続させていこうか」、「どうやって一般化していこうか」と考えていました。今回の会議に参加して、「子どもたちが自ら学ぶ」、「教員が自らやり通す」、「学校全体が意識を持って行政とやってやる」、そして「地域へ広げていく」というようにいろいろなステップがあると思うんですけど、今後、具体的に考えて頑張っていきたいなと思いました。

金井 今、お話し頂いた3人の先生は、一回目から毎回参加して頂いております。多くの先生が、3人の先生と同じように、「黒潮町の町をあげて一生懸命やっている姿勢は凄いな」と感じて頂いたかと思います。今回、黒潮町の先生方にも沢山参加して頂きました。今回初めて参加していただいた先生からもお話をさせて頂きたいと思います。

山本 黒潮町立拳ノ川小学校の山本です。今話にあったように、黒潮町の独自の取り組みは、町行政とそれぞれの学校玄関が一体となっている。昨日の町長の話の中にもあったように、その思想って言いますか、目指すものがはっきりしてぶれないというところが、黒潮町の一番の強みだと思っています。かねてから片田先生が指摘されていて、小木中の実践の中にもあったように、やがては子どもたちの学力向上とか、生き抜く力まで育てていこうと思っております。「きっとそうなるんじゃないか」と思いながら、自分たちもそれぞれの学校現場で実践をしていました。

が、今回の会議に参加をして、他校や他県の話聞くなかで、それは間違いないなと思っていました。

防災教育が、今までの教育内容と大きく違うのは、「自分たちの命」、「生きる」ということとダイレクトに関わってくる点だと思います。だから、子どもも、家庭も、地域も、それから自分たち教職員も一生懸命になり得ることができると。こういうのは今までになかった教育内容だと思っています。ただ、学校現場では、教育課程の編成と防災教育をどう関連付けていくかなど、まだまだ越えていかなければならないハードルはあります。

今のところ自分の学校の中での位置付けは、総合的な学習とか学級活動の時間を活用して進めています。これからは道徳科と同じように、防災教育科という大きな教科のような中身になればと願っております。まだ教育課程の編成の中ではなかなか難しいですが、少なくとも黒潮町は10年後につながる、小学校1年生から中学校の3年生までの9年間を見通したプログラムを確立しています。だから、10年後の子どもたちの姿を描きながら、進んでいると思います。まだまだ“伸びしろ”はたくさんあるので、自分たちの実践もそれぞれ工夫ができる場所だと感じています。



金井 黒山本先生からお話があった通り、黒潮町は、町をあげてぶれないでやってきているというのが強みです。しかし、多くの地域はまだそうはなっていないくて、先生方が孤軍奮闘されているところもあると思います。これまで長く実践されてきた津田中学校から佐藤先生、小西先生に今回初めて参加していただきました。他の地域の事例を聞いて、何かお感じになったことがあれば伺いたいです。

佐藤 徳島市立津田中学校の佐藤です。今回初めて参加させて頂いて、すごく勉強になるというか、良かったなという面がたくさんありました。というのは、防災教育に関しては県の方から「防災プログラムを全学年作りなさい」といった指導があって、それで熱心にやっているという感じがしています。県でもいろんなことをやっているのですが、来ている方は管理職の人ばかりで、マニュアル作って終わりとか、そういう会もたくさんあります。しかし、今日の会のような“横のつながり”といいますか、こうやって皆でぎっくばらんに語り合っている会が余りないんですね。ですから、今回参加させて頂いて、“横のつながり”がすごく大事なんだなと非常に感じました。いろんな実践されているお話を聞いて、それを次に生かせるというのは凄くありがたいことですし、嬉しいことですし、本当に今回参加させて頂いて、「こういう人たちっているんだな」ということを率直に感じました。本当に良かったなと思っています。

今回、「防災教育における授業」について議論がありました。これから津田中学校でもやっていかなければと思いました。これまで津田中学校は、「防災教育を授業で実践」という形とは違ったやり方をしています。防災教育は、いろんな実践があつていいと思うんです。「津田中学校は、全体ではどうされているんですか」とよく聞かれます。「一部の子はすごいけれども、全体はどうなんですか」という聞かれ方をよくします。津田のやり方は、100人いたら80人は0.5歩ずつ進んでいきます。全体を一步二歩と進めるやり方ではなく、本当にじわじわなんですけど進んでいるんです。その代り、他の20人が40歩くらいズドンと突き抜けて進みます。その子どもたちが80人の中から一人、二人、三人と取り込んでいって全体を底上げするんです。ですから、子どもたちが主体的に防災教育をやりだすわけです。OB会ができたりまするんです。今回も2年生は出前授業に行きましたけど、担任の先生は何もしません。防災講座の子どもたちが4つのクラスに行って、「こういうことするんですよ」、「こういうふうにするんですよ」と説明して、出前授業に行きました。中には金髪やら茶髪も何人かいるんですけど、その子たちも一緒に保育所とか幼稚園に行きまして、〇×ゲームをやったりして、楽しく過ごして、帰ってきました。そして、感想を見ると「おもしろかった」と。その子たちの中でも、小さい子に教えることを通じて、「僕らも勉強になった」と書いてありました。

今後はも、そういう実践を続けていながら、今回いろいろと勉強させてもらった授業なども取り入れながら、防災教育をこれからやっていかなければならないなと思いました。

小西 津田中学校に長い間いた小西です。最初に開放座談会中で、黒潮町の教育委員会の教育次長さんが「子どもは命を懸けて故郷を守っていくんだ」という話をされたと思うんです。あの言葉が、まさに津田中学校の先ほど佐藤先生がお話した20人の姿なんです。13歳、14歳から「如何に津田を守っていくか」という地域貢献を、その一点にかけてやっていく子どもたちが、毎年20、30人というわけです。それが毎年つながっていきますので、もうすでに一番上の子は23歳になりましたけども、そこからずっとその下がつながっている。その子どもたちが故郷を守っている、という良いつながりができます。ですから、その話がとても自分たちにとっては、「ぴったりきたな」、「しっくりきたな」と感じました。

金井 佐藤先生から、「横の繋がり」というお話を頂きました。今回、徳島市の津田中学校さん、高知市の城西中学校さん、それから大阪の鶴見橋中学校さんに事例発表していただきました。今回参加していただく前に、3校とも大変素晴らしい実践をされていると伺っていたので、この会への参加のお願いをするために3校を訪問させていただきました。訪問してお話を聞いてみると、3校ともそれぞれの学校のことを御存知だったんです。最初に城西中学校に行って、「このあと津田中学校に行くんです」って言ったら、「小西先生、佐藤先生のところね」とすでに面識があつた。また大阪をお邪魔したら、木下先生もお二人のことをご存知だった。小さい範囲ですが、つながりはあつたんですよね。今回、せつかくもっとさらに広い範囲で、全国的に先生方に集まって頂いているので、毎回申し上げているのですが、参加して頂いた先生同士で、交流して頂ければと思います。

それから、私は、津田中学校を訪問しお話を聞くなかで、これは防災を通じたリーダー育成だけでなく、すごく良いキャリア教育にもなっているなと感じました。防災を通じて、人の役に立ったりと言って消防士になりたいと思ったり、学校の先生になって子どもたちに防災を教えるってあげたいとか、キャリア教育としての効果もあるのかなと感じました。

木下 大阪市立鶴見橋中学校の木下です。うちの生徒の学力の問題は、本当に厳しいです。うちのクラスの半分以上は学習障害として思い当ります。一言で言いましたら、保護者がいない家庭だったりすると、何にも教えてもらっていない。そのため本当に純粋で、いい意味で言えば、本何も分からない、生まれたての卵のような子どもたちなんです。だから、出会う大人によって本当に変わります。また、家に居場所がないという子どもたちもいる。そんな中で、「何故勉強しないといけないのか」が純粋にわからない子どもたちと過ごしてきました。その中でも防災教育に関しましては、むしろ勉強ができない子どもが一生懸命やりましたし、むしろ家庭環境が非常に辛い子どもが「人の役に立てる」とか「命を大切にする」といった活動を、非常に頑張るようになりました。災害が起きたときは皆で助け合わないといけないので、皆のために一生懸命に手伝ったりすることができる子どもに育ってきているのを見ると、防災教育が本当に力になったなと思っています。

何人かの子どもたちは、毎朝、自分たちで学校の玄関の掃除をするようになっています。その掃除をしている子どもたちの一人の子の話なんですけど、その子は親もいるんですけど、毎朝小さな妹を保育園に送ってから学校に来ています。そして、放課後もすぐ帰って、迎えにも行きます。でも、その子は朝 8 時に間に合うようにちゃんと来て、掃除しています。本当に純粋な笑顔で「おはよう」と友達や後輩に声をかけているんです。その姿を毎日見て、「自分もやらざるを得ない」と思うようになり、子どもに変えて頂きました。だから、子どもたちの可能性を信じて頑張っていきたいなと思いますし、今回、本当に勉強させて頂きましたので、また、川島先生（大阪市立鶴見橋中学校）と二人頑張っていこうと決意しているところでございます。

太田 田辺市立芳養小学校の太田です。いろんな実践を見させて頂きまして、教員として防災学習を進めていく上で様々なヒントを頂いたというか、学校の中でいろんな実践を進めていく方法や材料がたくさん集まった、かなり収穫があったなと感じています。

最初、防災教育を始めた頃は「ちょっと実践してみなさい」と言われて、ハザードマップ作りだとか、見様見真似でいろんなことをやっていて、そのときは「防災教育ってこんなものかな」って思いながら授業をやっていました。しかし、今回、「子どもが命を見つめる」という授業を実際に実践してみて、子どもたちが授業を通して、家族を見つめ直したりとか、お友達のことを思いやったりとかするようになったことを実感し、防災教育として、色々な効果が生まれてくるような授業が幅広くできるのかなと感じました。今後、授業をそういう視点で考えていけたらいいかなと思いました。

うちの学校は“学社融合”ということで、地域の人も含めて学校に入ってもらって、「地域の人が子どもたちを見て、地域の人に学ぶ」ということを授業の中にたくさん取り入れながら、学習活動を行っています。そこにも防災の学習を取り入れながら、いろいろな広がりを作っていけるかなと思いました。まだ具体的にどんなふうにしていったらいいかはわかりませんが、いろんな可能性が広がるなって感じていました。

今回初めて参加しましたが、それぞれのお話を伺って、こんな機会じゃないと自分の授業風景を見る機会もないので、すごく自分の授業の反省もできましたし、凄く勉強をさせて頂きました。

山本 田辺市立大塔中学校の山本です。今回、私も初めて参加させて頂いて、防災に対して様々な視点から見ての方がいらっしゃったので、そこが勉強させてもらったところかなと思います。私自身もこの前授業をさせて頂いたんですけども、それが全てなのかどうなのかというところで、太田先生と一緒にちょっと悩んでいるところがありました。昨日グループ協議の中で、佐藤先生にいろいろとお話して頂き、「どういうことから始めていったらいいか」と相談させて頂いたときに、「無理をしないで自分ができるところから、とりあえず始めてみたらどう」と言って頂いて、私自身、肩の力がふって抜けたような気がしたんです。自分自身が無理してやろうとすれば、子どもたちもきっと無理するだろうし、自分自身ができることから始めたら、子どもたちも自分たちができることから考えて始めていくから、まずはやっぱり、そこからスタートなんだなと感じました。

それと、地域の方との交流の仕方もヒントを頂きました。地域の強いところと弱いところを自分たちで話し合っ、まず今の地域にどういう状況かということ把握して、そこから良いところはどんどん伸ばしていったらいいし、自分たちの弱いところを地域の方々と共有し合っ、自分たちで解決に向かう試みを少しずつ進んでいけたらなと思います。私もまた帰って、できることから少しずつ始めていきたいなと感じました。

それと、防災だけではなくて、学校教育っていうことはいろいろな問題があり、やらなければいけないことがたくさんあります。学力の向上、体力の向上、また生徒の問題、暴力等の問題など、様々な課題を抱えながら同時進行でやっていかないといけない。防災教育もその中の一つ、と私は今まで考えてきたんですけども、この会に参加させて頂いて、防災教育をすることによって、自ら考えて行動できる生徒の育成が学力向上につながる。防災教育を通じて、皆で力を合わせる、そして命の重み、他人への感謝の気持ち、そういうことにもつながってくるという話も私の中で印象に残っています。さらにまた自分自身もできる限り高めていきたいなという向上心を持って、これから取り組んでいきたいなと思います。

金井 お二人の先生とも各校の防災教育担当者として、田辺市の担当者会に参加されています。ぜひ今回の経験を、ご自身の学校、担当者会議の中で伝えて頂ければと思います。



大川 尾鷲市立矢浜小学校の大川です。先生方の話を聞いて、「自分自身がこれまでやってきたことは足りなかった」と思いました。「自分たちが何とかして子どもたちにこういうことを教えなきゃいけない」とか、「こういう子どもたちに育ててほしい」という願いはあるんですけど

れども、結局は教え込みであったり、引っ張っていってしまう部分があったりして、子どもたちが自主的に活動するという部分が、とても弱かったなって改めて思いました。

それともう一つ思うのは、自分のように教頭の立場でここへ参加してもらうよりも、やっぱり小中学校の担任の立場で、子どもと毎日一緒に生活している先生方が、このような中でいろんな話を聞かせて頂いて、その中から「よし、帰ったらあれをやってみよう」というところにつなげていくのが、一番大事だなと思いました。そういう点ではこういう機会があることを自分自身も教職員に広げていきたいと思いました。

中村 尾鷲市立賀田小学校の中村です。私は、5、6年生の複式クラスの担任をしていて、去年からの持ち上がりなので、2年間、同じ子どもたちと向き合っているところです。最初に話にでていた学力については、「防災を頑張ったから学力が上がった」ということは全然できないなと感じています。ただ、“気持ちの優しさ”には効果が現れてきているように感じます。昭和の南海地震や津波の話をした後に、すごくやんちゃな子が、毎日学校からの帰り道ですれ違うおばあちゃんに「おばあちゃん、地震とか津波のこと知っているの？」と話しかけたそうです。その子には、そのおばあちゃんが80歳以上に見えたらしく、それなら地震を経験しているかもしれないと思い、聞いたそうです。学校ではとてもやんちゃして、いつも怒られているような子が、地域のおばあちゃんに声をかけて、津波のときのことをいろいろ聞いて、それを次の日学校で「あそこのおばあちゃん、何か知っているんだって」と言って、友達に話してくれました。それから、「保護者が自分のことをどれだけ大事に思ってくれているか」ということを感じた後で、お母さんが調子の悪かったときに、その子は「家庭科でカレーを作れるようになったから」と言ってカレーを作ってくれたそうです。保護者の方は「そんなことしてくれたのは初めてで嬉しかったです」と言っていました。学力面では「明らかに良くなりました」という報告はできないんですが、“気持ちの優しさ”とか“命の大切さ”という部分では、随分子ども達には伝わってくれているんじゃないかなと思います。

5、6年生なので、「低学年に自分たちが学習したことを伝えに行こう」とか、「な紙芝居を作ろう」とか「歌でやっぺいこう」とか「保育園に伝えに行こう」という計画を立てているところです。そういう自分達発信で他の学年にどんどん広げていく。それが学校全体のものになっていく。また、小学校を卒業したら中学校に行くので、小学校と中学校が連携してやっぺいすることで、それをさらに地域にどんどん広げていく。「こうなったらいいな」という理想はあるんですけど、まだまだできてないところが多いです。でも、まずは地域からの目とか、教員の目からとか、色々な目で地域を盛り上げていって、「賀田は頑張っているよ」というアピールをすることも大事なのかなと感じました。

あとは管理職と同じ方向を向くとか、教育委員会にも後押しして欲しいなって思うときもあります。皆がそれぞれが独立してやるのではなくて、黒潮町みたいに皆で同じ方向を向いていくっていうのは、とっても大事だなと感じました。



金井 中村先生が最後に教育委員会の後押し、との発言もありましたが、その前のところで「防災教育を通じて、学力と言うまでにはいかないけれども、命の大切さ、気持ちの優しさというのはすごい感じるころはある」とのことでしたが、確かにそうなんだと思いますね。

ただですね、「防災教育をやりましょう」と言ったら、多くの先生は「防災を教える教育をやりましょう」とイメージしちゃうので、そうすると「逃げ方を教えて、いざというときにちゃんと逃げられるようなスキルを避難訓練で身に付けさせとけばいいんでしょ」となってしまう。ここに集まって頂いている先生方のように、防災教育の可能性を広げて考えていくことができずに、話がかみ合わなくて、それが学校全体に広がらない理由になっているのかなという気がするんですよね。それで、何が必要なのかなという、学校の先生なので「教えている目の前の子どもが変わっていく」、「そのよく変わったところと一緒に見て、変化を実感する」という成功体験を多くの先生方と共有することができる取り組みや支援が必要なのかなと感じています。広げる方法を少し真剣に考えなければいけないなというのを少し感じました。

広げる役割と言うと、教育委員会の話が中村先生からもあったので、教育委員会の方からお話を聞きたいと思います。

福田 和歌山県新宮市教育委員会の福田です。今年度から教育委員会に異動になりました。今回、黒潮町の行政と学校が一体となった取組はすごいなと思いました。自分自身のことを思うと、自分の仕事の中には、人権教育だったり、生徒指導だったり、スクールカウンセラーだったりがある中で、その中の一つという感じで防災をやっていました。また、市には防災推進課がありまして、そちらでも防災を進めているので、「自分のすべきことはどういうことか」というのが、はっきり見えていませんでした。しかし、今回黒潮に来させてもらって、協力しながら、学校と行政をつなぐことが、今の僕の仕事だなと思いました。

今度の1月に行政主体の防災訓練があります。学校にも積極的に参加して、生徒も参加させて、という話もさせてもらっています。今回、この会議に参加させていただいたことを踏まえて、行政とも相談しながら、学校をどう巻き込んでいくか、できればその地区の学校の先生方にも入ってもらいながら話を進められたら、もっとつながっていけるのではないかと思います。それは帰ってから頑張ってみます。

奥村 尾鷲市教育委員会の奥村です。今年から尾鷲市の指導主事になりましたけど、それまでは、尾鷲市で社会教育を3年、そして三重県教育委員会で社会教育主事を4年させて頂いておりました。先ほど気付いたんですけども、自分の思った防災教育は、昔の「逃げる」というイメージでした。それよりも一歩進んだ防災教育というものを、前回、片田先生が尾鷲にきていただい

たときに仰って頂いた話からなんとなく理解していたつもりでしたが、今回、この会議に参加させていただいて、「今後やっていくことはこういうことなんだ」とつながりました。皆さんの実践を聞かせて頂いて、黒潮町さんがやられているように、今後、行政と学校がつながっていく方向で防災教育を進めていきたいと思います。多くの先生が防災教育をやられていますので、それを支援するのが私の仕事だと思いますので、よい方向に進めていきたいと思います。最後に開催地を代表して、畦地さん。お願いします。

金井
畦地

二日間、黒潮町にお出でくださいまして、ありがとうございます。缶詰もたくさん買って頂きまして、ありがとうございます。

“一体になった取り組み”と非常にお褒め頂きました。“一体になった取り組み”というよりはむしろ、“行政が先生方に押し付けている”というのが、ある意味現実ではなかろうかなと思っています。ですから、順応していく先生方は大変だなというのが本音ではないかなと。ただ、先程、「先生を動員」という話になりましたけれども、決して我々は、先生方を動員してはおりません。昨日、今日の参加については、「各学校の判断をお願いします」ということになっております。学校によっては勤務日になっている学校もあろうかと思いますが、そうでない学校もあるということです。昨日、大勢の町内の先生方が参加してくれたのは、「来なさい」と一言も言っているわけではなくて、「できたら参加してください」という内容案内だけであれば来て頂けるのは、熱意の表れです。先生方の名誉のため言っておきたいと思います。

一体的に取り組みができるようになってきたのは、まさしくトップの姿勢があったからなんですね。トップが「一人の犠牲者も出さないんだ」という大きな姿勢があった。その姿勢を持つには、日本一の想定をもらったということ。そういうものがあるので、全員が一方向を向いて取り組みができていくというのは間違いないと思っています。しかし、二日間の議論の中でうちの町に欠けているのは、大きく二つだなあと思いました。一つ目は、子どもたちが主体的に「僕たちこういうことをやりたいんです」というところが少ない。特に中学生についてはそういった取り組みが欲しいんだけど、そういうものはうちにはないです。二つ目が、地域と連携をした取り組みが不十分であると思います。多くの避難訓練等はするんですけども、本当に子どもたちが地域に感謝される場面を得られるような連携がない。この二つが、今のうちの弱い点かなと感じたところでした。

僕は一般行政職の職員なので、何かするときにはいろんなことが頭を駆け巡ります。防災教育にしても、「ああ、これは売れるかな」と思っています。まずは、そのまま防災教育を売りたいと思っただけで、例えば、カリキュラムという本であつたりとか、防災教育というシステムを売る。あるいは、うちの町に来て頂くと、「“命の教育”とかも含めて、防災教育についていろんなことが学ぶことができますよ」というように修学旅行の誘致とか、そういうことができないかなあと思っています。実はうちのNPOは第三種の旅行業の免許を持っているので、情報を持っているので、将来は防災教育も町の産業にしていきたいなと思っています。

ということで、二日間どうもありがとうございました。



金井 今回 3 回目として、黒潮町で開催させていただきました。この会を通じて、「防災教育をどうやって行ったらいいのか」という問題意識の共有ができかこと、また何人かの先生に仰って頂いたように、元気になって、やる気ももらって、熱ももらって帰って頂けるということは、この会を開催させて頂いた側として、非常に嬉しく思います。ただ、ぜひお願いしたいのですが、「いやあ、いい話を聞いた、頑張ろう」と思って帰って頂いたのに、年が明けて忘れてもとに戻らないでくださいね。今だったら、来年の4月から始まる新学期に「どうやって防災教育を取り組んでいこうか」というのを考えて計画するのにまだ間に合うと思います。3学期中に実施してください、と言われると大変だと思いますので、来年度に向けて準備をすすめていただければと思います。そして、ご自身または学校で何かしらの取り組みを実践していただいて、その結果をもって、また皆さんとディスカッションさせて頂いたらなと思っております。